

障害児者へのプレイバックシアター公演実施における 必要能力と配慮点の一考察

長船博子

スクール・オブ・プレイバックシアター日本校5期生

<要旨>

障害児者と施設職員、その家族を観客に行ったプレイバックシアター公演の概要を、事前準備、ストーリーのインタビューとテラーの反応、観客の反応、アクター、ミュージシャンの演技に分けてまとめた。その経験から、障害児者にプレイバックシアター公演を行う際に必要な要素や配慮点について考察した。結果、公演を行うために、テラーの理解力と表出手段、コンダクターの障害理解と状況対応能力、アクター、ミュージシャンの事前準備や観客に合わせた分かりやすいセリフやダイナミックな表現の能力、出演者と観客との一致、物理的、人的環境が公演に大きな影響を与えることが示唆された。

<目次>

1、はじめに

2、障害児者に対する PBT 公演の実際

2-1 公演の概要

2-2 事前準備

2-3 ストーリーのインタビューとテラーの反応

2-3-1 インタビューの事例

2-3-2 上演中のテラーの反応

2-4 観客の反応

2-5 アクター、ミュージシャンの演技

3、考察

3-1 インタビューに必要なテラーの能力

3-2 テラーや観客へのインタビュー時間の影響

3-3 アクター・ミュージシャンの能力と意義

3-4 安心安全な場作りの為の物理的・人的環境

3-5 コンダクターに求められる能力

4、結論

5、おわりに

6、文献

1、はじめに

障害を持つ人が自分のストーリーを語るということが、ノーマライゼーションの思想の広がりや障害に対する理解の深まりや、インターネットやテレビなど様々な手段の確立があり、多くの人々の目に留まる機会が増え、社会で受け入れられるようになってきている。しかし、それらの手段でストーリーを語れる障害者は、障害の種別や程度の差のために限られており、障害を持つ人がみな自分のストーリーを語る事が出来る訳ではない。

プレイバックシアターは一般の演劇とは異なり、観客と一体となった形式をとる。特に、テラー（語り手）のごく個人的な体験をその場で語ってもらい、それが即興で演じられるため、テラーの語るストーリーはその場に集まる人たちに大きな影響を与える。テラーが何を語るか、語られたストーリーがどのように演じられるかが、一つの公演の深さに関わってくる。

2012年10月14日、2013年3月10日の2回肢体不自由児、重症心身障害児施設にて、障害児とその家族、スタッフに対するプレイバックシアター公演を行う機会があった。流暢に言葉を綴れなくてもプレイバックシアターを通して自分のストーリーや気持ちを自分なりの方法で語り、多くの人に共有することができ、他者に承認される機会を得られた障害児もいた。それは彼らにとって大きな経験であり、演じられるストーリーを見る表情はとても嬉しそうだった。また、その場にいたスタッフからは、重度の障害を子ども達にとってとてもあった手法だという感想も得られた。

テラーになるには、ある程度の物事の理解や、表現が求められることも事実であり、プレイバックシアターでストーリーを語れる発達段階や表出手段の見極めが重要だと思われる。しかし、コンダクターがどのようにインタビューをしていく必要があるかは論じられているが、プレイバックシアターのテラーに求められる能力について、論じられるものを見ることはできない。この論文ではテラーに求められる能力と、インタビューでのコンダクターの配慮点について検討する。また、障害児に対してより良い公演を行う為に必要な、アクティングや音楽、公演開催時の配慮について、肢体不自由児、重症心身障害児障害児の特性をふまえて検討する。

2. 障害児者に対する PBT 公演の実際

2-1. 公演の概要

障害児者を交えたプレイバックシアター公演は、2回開催され、どちらも会場は福島整肢療護園（肢体不自由児、重症心身障害児施設）希望館にて14時から15時半の1時間半で行われた。

1回目は2012年10月14日に実施され、約35人が参加した。参加者は、入院児者、入院児者の家族、施設職員、施設職員の家族で、公演への参加を希望した者であった。プレイバックシアター公演を何度か見たことのある人から、初めての参加で重度の障害があり言語の理解が難しい子どもや、保育園に通う1歳児まで幅広い状況であった。劇団プレイバックーズに加え施設職員がミュージシャンとして出演した。ストーリーは全部で5本語られ、うち3本が障害児者（AさんBさんCさん）のものだった。

2回目は2013年3月10日に行われ、約40人が参加した。1回目と同様の参加者に加え、外来通院児者、外来通院児者の家族も参加した。劇団プレイバックーズと、施設職員2名がストーリーのアクター、1名がミュージシャンとして出演した。ストーリーは2本中、1本が障害児（Dさん）のものであった。もう1名ストーリーを募った時に举手した児童がいたが（Eさん）、ストーリーのインタビューに答えることが困難であったため急遽、動く彫刻に変更した。

コンダクターは2回とも、元施設職員であった筆者が行った。

2-2. 事前準備

チラシの作成：どのようなテーマで公演を行うか、主催者と筆者で相談し決定後に、筆者がチラシの原案を作成。それに施設職員がシンボルや絵を添えて文字理解が困難な障害児にも興味を与えるよう構成し直して掲示した。チラシには、観客の体験談を即興で演じること、楽器を使うこと、発作が起きたりや大きな音が苦手な子は公演中の会場への出入りが自由であることを予告した。（図1）

声かけ：職員の何人かは面会された入院時の保護者や外来通院児の保護者に声をかけ、公演に誘った。

会場の準備：

会場となった希望館は絨毯敷で土足厳禁だったため、ブルーシートを敷いて、車いすのままでも中に入れるように設定した。客席はあらかじめ椅子を並べずに付き添いの人が背もたれのない丸椅子をもって一緒に移動して座れるようにしていた。その為、様々なサイズの椅子があっても詰め合っただけで会場に入ることが出来た。

アクターへの情報提供：

実際に開場されるまで、どのような障害の参加者が集まるか分からない状態だった。そのため、元施設職員だったコンダクターが、文字盤やジェスチャーなどの方法でインタビューすることがあるということ、人によっては大きな音を怖がること、開場が混み合っていると大きな車いすでテラー席に移動することが難しいこと、など予想される状況について話し合っていた。

2-3. ストーリーのインタビューとテラーの反応

2-3-1 インタビューの事例

<事例 A>

疾患名：脳性麻痺

表出手段：不明瞭な音声での「はい」「いいえ」、首を横に振る等のジェスチャー、いくつかのマカトンサイン（注1）、シンボル（注2）

ストーリーの内容：

「いつもと違う帰り道」

毎日、学校に通う道がある。

その日はいつもと違うことがあった。

ちょうちょが、飛んでいたのだ。

そのちょうちょは、黄色くひらひらと飛んでいた。

それを見て楽しい気持ちになった。

（プレイバックカーズホームページより）

コンダクターとテラーのやり取り：

客席から施設職員と一緒に手を挙げて、テラーになる意思表示をし、電動車いすを職員が押してテラー席に移動した。インタビュー時には、その職員にも A さんの横（コンダクターの反対側）で同席してもらった。どこでおきたことかは、A さんの生活の中からいくつか予想し、「病棟ですか?」、「学校ですか?」と選択肢をコンダクターと職員であげ、本人が「はい」、「いいえ」で答えられるようにして聞き取った。また、A さんが文章ではなく単語で答えられるような質問をコンダクターが行い、それに A さん自身が「ちょうちょ」や「きいろ」を日常使用している自分のコミュニケーションノートのシンボルを指して、「見た」や「楽しい」はマカトンサインで答えた。途中、コンダクターの質問を聞いて A さんの動きがとまり、考えが止まっているような時には、付き添いの職員が普段 A さんに話しかける口調で話しやすい雰囲気と言い換え、気分を盛り上げるよう配慮しながら答えを引き出したりした。途中、A さんと職員で会話が行われ、観客との一体感が感じられない雰囲気があったため、コンダクターが客席にむかって A さんのストーリーを伝えながら、コンダクターがインタビューをコントロールできるよう意識した。

<事例 B>

疾患名：脳性麻痺

表出手段：不明瞭な音声での「はい」、「いいえ」、首を横に振る等のジェスチャー、選択肢から選ぶ

ストーリーの内容：

「修学旅行で」

9月に修学旅行でディズニーランドに行った。

たくさんの乗り物もあったけれど、何よりもご飯の時間が楽しかった。いつも療護園で食べているのとは違う、それはそれは特別なものだった。

(プレイバックページより)

コンダクターとテラーのやり取り：

付き添いの施設職員とともに挙手してテラーの意思表示をし、座位保持装置を職員が押してテラー席に移動した。すでに修学旅行の話をすることを決めており、テラー席に座っ

た時点で職員が修学旅行の話をするのを伝えてくれた（職員同席）。インタビューはBさんが文章や単語を伝えることはできなかったが、コンダクターがBさんの修学旅行先に見当がついていたため、いくつかの選択肢をあげてその中からテラーが選ぶ方法で進めることができた。コンダクターは選択肢を提示するとき、そのどれにも当てはまらない場合も想定し、必ず「その（コンダクターが提示した選択肢の）どれも無い」という選択肢もあることを伝えるよう意識した。自分の気持ちに合うものを「あい（はい）」と声を出したり、笑顔でコンダクターを見る等したりして、意思を伝えることが出来た。また、コンダクターが自身の両手をBさんの目の前にそれぞれの手に「乗り物にのったこと」、「ご飯を食べたこと」など意味を附して提示し、Bさんが手を伸ばして状況、気持ちを選択する方法をとった。

<事例C>

疾患名：脳性麻痺

普段の表出手段：慣れている人でないと聞き取れない不明瞭な音声、文字盤での簡単な文章の作成、首を横に振る等のジェスチャー、シンボル

ストーリーの内容：

「久しぶりの外出」

入院しているので、なかなか外出のチャンスがない。先日、アクアマリン水族館まで、入院している子どもたちと一緒に出かけた。車に乗って、たくさんの魚を見た。みんなで行ってこられたことが、とてもうれしかった。入場券は大事な宝物になって机に挟んである。

（プレイバックーズホームページより）

コンダクターとテラーのやり取り：

付き添いの職員と挙手し、職員に座位保持装置を押してもらいテラー席に移動。Cさんの座位保持装置机に貼ってあった水族館の入場券の半券を指で指した為、この話をするのかと確認すると「あい（はい）」と返答。一緒にいった人の名前などを1文字ずつ文字盤を使って答えたり、コンダクターが示すいくつかの答えの選択肢から自分の状況や気持ちに合うものを「はい」、「いいえ」で選んだりすることでインタビューを行った。机上の半券や

文字盤のポインティングでは、筋緊張を高め全身の不随意運動がでて、指し示すのに時間がかかり、本人も汗をかいていた。そのためインタビューの後半コンダクターは、テラーが文字盤を使い文章で答える必要がある質問はせず、単語や「はい」、「いいえ」で答えられる質問を行うようにした。

<事例D>

疾患名：レッシュ・ナイハン症候群

表出手段：不明瞭ではあるがゆっくり聞けば分かる音声、首を横に振る等のジェスチャー

ストーリーの内容：

「仲良しなのに」

中学の頃のことだ。仲良しの友人がいた。彼は文字盤を使って話をするのだが、いつも僕に「バ」「カ」と言ってばかりしてきた。僕と彼はとても仲が良いので、彼はふざけてからかってくるのだ。けれど、ついつい、いつも本気でムカッとしてしまうのだった。

(プレイバックーズホームページより)

コンダクターとテラーのやり取り：

テラーを募っているとき、客席にいるDさんがコンダクターを注視していることが多かった。テラーになりたい気持ちがある可能性を感じたため、コンダクターとしてDさんに個別に声をかけたところ、本人から「テラーになる」という意思表示があった。母親が座位保持機能付きのバギーを押してテラー席に移動した。インタビューには母親も同席した。インタビューは構音障害で聞き取り難さはあったが音声でやり取りを行った。コンダクターが聞き取れない部分は、同席した母親が通訳した。途中、不随意運動が多く汗が流れ、音声で答えようとするものの声を発するまでに著しく時間がかかり手足の緊張が高まる場面があった。インタビュー時間は8分30秒だった。

<事例E>

疾患名：脳性麻痺

日常表出手段：不明瞭な音声、首を横に振る等のジェスチャー、いくつかのマカトンサイン

動く彫刻の内容：みんなが見ていて楽しい

(プレイバックホームページより)

コンダクターとテラーのやり取り：

コンダクターがテラーを募った時に真っ先に「あい（はい）」と言い挙手。何度も挙手を続けたため、テラーに招いた。隣にいた職員が座位保持装置を押し、テラー席に移動した。しかし、コンダクターが質問した内容に答えることが難しく、興奮した様子で体を動かしていた。付き添いの職員と相談し、今の気持ちを動く彫刻で見ることにした。

2-3-2 上演中のテラーの反応

テラーになった障害児者5人とも、笑い声やうなづく様子が見られた。時折、筋緊張が亢進し手足がばたつくこともあったが、テラーとなった者は全員、アクターの動きに注目し続けていた。

2-4. 観客の反応

インタビュー中：

テラーがテラー席へ移動する時も動線上の人が譲り合い、空間を作ることでスムーズに移動が出来た。

インタビューの時間が長くなってしまうと、自分の席を立ってテラー席の方に近寄ってこようとする子どももいた。

上演中：

インタビュー中に集中が切れ、動き出していた客席の子どもも、ミュージシャンが奏でるイントロが始まると、ずっと興味が舞台に写り、椅子に座って劇を見入る様子があった。音楽やテラーの声などで時々、筋緊張が亢進し手足を突っ張らせたり、音に過敏で不安そうに耳を塞いだりする子どももいたが、付き添いの職員が一緒にいることで安心してその場にいることが出来ていた。中には体を起こして舞台を見るのが難しい子どももおり、その子らの目の動きや集中具合は確認することが出来なかった。

ミュージシャンの音楽に合わせて観客席の障害者が歌い出すことがあった。

2-5. アクター、ミュージシャンの演技

アクター、ミュージシャンはプレイバックーズと施設職員で構成された混合チームだった。プレイバックーズは数多くの公演を経験してきており、インタビューが長くなること、公演中に観客が席を立ったり、歌ったりすることに対しても問題なく演技をしていた。また、アクターになった施設職員は公演に出演するまで、4時間程度のワークショップを体験したのみであったが、障害児者の行動に日常から慣れていることもあり、長いインタビューにも集中が切れることがなかった。文字盤など障害児者が使うものの知識があるため、文字盤役を振られても抵抗なく即座に演じ、他の職員アクターも文字盤役を有効に利用できていた。

通常の公演と比較しテラーから語られる情報が少ないが、インタビューで出てきた内容から、テラーがみた「ちょうちょ」や「ディズニーランドの食事」、「文字盤」など、必要な脇役を選んで演じた。語彙の少ないテラーに合わせて、平易な言葉を使ったり、同じセリフを繰り返したりするよう意識していた。また、テラーの理解力を考え、体の動きを大きくすることや、セリフの抑揚をつけることで、ストーリーの情景をより伝わりやすくしストーリーを盛り上げていた。また、ミュージシャンは、テラーから語られた少ない情報から、語られきれていない気持ちの移り変わりを予測し、テラーの気持ちにあった楽器を選び、メロディーをつけて演劇を厚みのあるものにしていった。

3. 考察

障害児者に対するプレイバックシアター公演を経て、インタビューに必要なテラーの能力、テラーや観客へのインタビュー時間の影響、アクター・ミュージシャンの能力と意義、安心安全な場作りの為の物理的及び人的環境、コンダクターに求められる能力の5つの視点から求められる要素や配慮を考察した。

3-1 インタビューに必要なテラーの能力

今回、障害児を交えたプレイバックシアターの公演で語られた7本のストーリー中4本が、障害児がテラーとなった。

プレイバックシアターではコンダクター、アクター、ミュージシャンだけでなくテラー

にも自発性が求められる。テラーになるかどうか、どの話をするか、コンダクターとのやり取り、全てにおいてテラー自身が決めることが必要になる。仲邑らは、厚生労働科学研究費補助金障害保健福祉総合研究事業の平成14年度総括研究報告書の中で障害者の自己決定・自己管理を引き出す為に困った状況を考え、その背景にあるものとして、①発信が分かりにくい（糸口がつかめない）②発信はあるが、意味が分からない③コミュニケーション出来るが自分で決められない④指示が通らない（コミュニケーション出来ない）⑤勝手に行動する（自己管理が出来ない）⑥コミュニケーションが広がらない、の6つをあげている。¹⁾ 今回、Aさん、Bさん、Cさんは声によるコミュニケーションがままならず、障害者とのやりとりに慣れていない人の立場から見れば背景の②に相当する状況であったと考えられる。しかし、彼らは既に日常的に文字盤やシンボル、ジェスチャーを使い、時には複数を組み合わせた自分自身の表出方法を身につけており、それがストーリーを語ることを可能にしていた。

また、コンダクターがテラーの言葉を聞き取れない、ジェスチャーが分からない場面があったが、テラー席に付き添った職員や保護者が通訳のように発信することが可能であったため、スムーズにインタビューが出来た。必ずしも、コンダクターや多くの観客が分からない表出方法であったとしても、最低限身近な人に伝えられる能力があれば、その人を通訳としてストーリーのテラーになることが出来ると考えられた。

Eさんは、ストーリーではなく動く彫刻に変更になった。プレイバックシアターのインタビューはコンダクターによって、「いつ」、「どこで」起こった出来事なのか、どのような登場人物がいるのか、何が起こり、最後の場面をどこにするのかなど、アクターやミュージシャンが演じるのに最低限必要な情報が引き出される。Eさんは声を出したり、ジェスチャーをしたりすることでコンダクターを注目させ、自分の気持ちを発信することが可能であったが、コンダクターがストーリーを募っているということや、質問された内容を理解できず、インタビューの状況を仲邑らの言う背景に照らし合わせると④の状況にあったと考えられる。

また、過去の体験を語るという点でも、ある一定の知的発達が必要と思われる。もともとCさん、Dさんは自ら文字で文章を組立て、ストーリーを伝えることが可能であり、Aさんはシンボルを使って自分の気持ちや出来ごとを慣れている人に伝えることが出来ていた。また、Bさんも、問いかけを理解することが出来、「はい」、「いいえ」の受け答えが出来ていた。藤村は「子どもが自分自身の経験を言葉で表現し始めるのは、2歳代に入り、自己

の客観的な姿の理解をもち、自己のさまざまな側面において言語表現がみられるようになる時期である。最初のうちは、周囲の親等が多くの内容を話し、親の「～したんだよね？」などの問いかけに、子どもが「うん」と答えるような形で参加することから始まる。そして、次第に子ども自身が自分の経験を表現するようになる」、と言っている。²⁾ Aさん、Bさん、Cさん、Dさんはこの段階にあった。今回、Eさんは現状の自分の気持ちを表現することは出来るが、自分の経験を言葉で表現する段階に至っていないため、動く彫刻のテラーにはなれたが、ストーリーは難しかったと考えられる。

以上のことから、ストーリーのテラーになる為には、自分のストーリーを話せる2歳代の知的発達でコンダクターの質問を理解でき、何らかの表出手段がある、もしくは通訳する人を介してコンダクターに自分の気持ちを伝えられる能力必要だと考えられた。

3-2 テラーや観客へのインタビュー時間の影響

コンダクターによるインタビューは、必要な情報を出来るだけ短い時間に引き出されるが、構音に不自由を抱える障害児へのインタビューは一般的なインタビューよりも時間がかかる。Dさんは、インタビュー中も話し出す時に力が入りなかなか声を出せない場面があったり、構音障害のためコンダクターが聞き取れず母親の通訳を待ったりすることもあった。そのため、インタビューの時間は8分30秒と長く、観客はテンポ良く進んでいる印象を受けなかつただろう。Aさん、Cさんの場合は、コミュニケーションノートや机上の文字盤を使用したため、観客からは何が行われているか見えず、コンダクターが音声言語に置き換えて発信するまでの間、置き去りにされたような雰囲気になっていたように思う。さらに、観客の中には言葉の理解が困難である子どもや、単語や短い文節であれば理解できても、一つのストーリーとして言葉で理解することが難しい子どももいた。今回、コンダクターは極力、テラーと客席をつなぐように意識し、テラーの語ったことを即座に観客に伝えたつもりだったが、理解や集中が続かない子どもが、耐えられず席を立つということになったと思われる。

また、テラー席についた障害児者が、筋緊張を高め不随意運動が激しくなったりインタビューの後半に汗を流したりする様子が見られた。脳性麻痺のアテトーゼタイプなど障害によって、筋緊張の低下や高まりは日常生活の中で不随意に変動し、心理的緊張を伴いつつ意図的動作を行う際には緊張が高まる³⁾。レッシュ・ナイハン症候群も不随意運動が症状として認められ、自身が思うような動きがし難くなる。公演では、観客の注目を集めるテ

ラー席という精神的な緊張、文字盤のポインティング、声で話そうとする意図的な行為が、不随意運動を強くし、効率よく動くことを困難にし、上手く伝えられない焦りを招き、不随意運動につながるという悪循環になりかねない。質問に答えるという作業も障害児者にとっては大変な運動であり、今回のように汗が流れ、疲れてしまい深呼吸のような深いため息が漏れたと考えられる。

観客の集中を維持すること、テラーの疲労を少なくすることをふまえて、コンダクターはインタビューの時間を通常の公演よりも意識する必要があり短い時間で、ストーリーの核心に迫る的確な質問を、少ない質問数で選んでいく能力が必要と考えられた。

3-3 アクター・ミュージシャンの能力と意義

インタビューを受けて、ストーリーはアクター、ミュージシャンによって演じられる。障害児者がテラーになり、ストーリーを語る時、前に述べた通り、インタビューはより短く、より少ない質問で行われることが多くなる。Aさんが語ったスリーリーでは、登場人物がテラーとちょうちょだけの、まとめれば「下校時に黄色いちょうちょが飛んでいるのを見て楽しかった」という30文字ほどで言えるシンプルなストーリーだ。しかし、入院していて一人で自由に外出はできず、外遊びの機会が同世代の子どもに比べ少ないAさんにとって、ちょうちょを見たことはとても大きなことであったと思われる。アクター達はインタビューで聞かれなかったちょうちょの数を、劇中で2羽登場させテラーズアクターに語りかけ、周りを軽やかに飛び、楽しい雰囲気を作った。テラーからは手足を動かし声を上げて笑う様子が見られ、満足した様子が伺えた。また例えば、1人が忍者ロール（注3）で電動車いすになって「学校に行くのはいつものこと」、「今日は特別なことが起きたね」と語りかけても、Aさんに非日常が際立ったかもしれない。テラーがインタビューで語ったストーリーは短いため、テラーズアクターが長々とテラーの状況を台詞にするのはリアリティに欠け、テラー自身の意思にそぐわない。そのため、ストーリーを深く鮮やかに浮き上がらせるのは忍者ロールと、言葉ではない表現が出来る音楽である。Salasは良いプレイバックシアターのコンダクターの役割として、年齢、文化、民族や背景等のサブグループに対する感受性を示すことが、公演に広がりをもたせ、そこにいる人々全てにとって満足いくものとなる一つの要因と語っている。³⁾ 障害児者へのプレイバックシアターは、インタビューでは引き出しきれない情報もあることが考えられ、それを即興で演じる為にも、アクター、ミュージシャンはコンダクターと同様に障害児者のもつ背景や日常に目を向け

る必要があると考える。今回、アクターになったプレイバックズのメンバーはアクターとして必要とされる「即興性」、「表現力」、「演じる役の多様性」、「協調性」、「人間としての習熟度」、「オーセンティックであること」⁵⁾ に向き合い、数々の公演を重ね日々トレーニングを積んでいる。また、事前に障害児者の特徴やインタビューの方法についての予想、施設での生活についても話していた。そのような準備をして公演に臨めたからこそ、長い時間がかかるインタビューでテラーから引き出せた情報が少なくともコンダクターは信頼してストーリーを預けられ、アクターは公演中に障害者が歌い出すことがあっても動揺することなく演じ、テラーが満足するものを返せたものと思われる。また、忘れてはならないのが、施設職員アクターと、ミュージシャンの存在だ。いくら事前にプレイバックズのメンバーが情報を聞いていたとしても、入院児者の個々の性格や生活の中にある音や匂いまでは感じることは出来ない。施設職員だからこそ、テラーの話から敏感に情景を感じ取り、体の動きや奏でる音でプレイバックズだけでは表現できない場面を作りあげることが出来た。いつもの職員が、アクターといういつもと違う立場で作上げたストーリーは、テラーも観客もより馴染みやすく一体感を感じられるものとなったと考えられる。

公演の中で、インタビュー中に集中が切れ、自分の席を立ってテラー席の方に近づこうとした子どもが、ミュージシャンから始まるイントロで注意を引き戻され、アクターの動きに目を奪われる様子が見られた。インタビューの時間についての項目で述べた通り、インタビューが長く、テラーやコンダクターの言葉が理解できず、集中が途切れてしまったと考えられる。小さい子どもや、ことばの遅い子どもに話しかけるときには、ゆっくりと、はっきり、単語と単語の間に適当な間を置いて話してあげることが大切⁶⁾ で、アクターが意識的に平易な言葉で、同じセリフを繰り返したことは参加者の理解に合っていた。更には言葉だけに頼らないアクターのダイナミックな動きが視覚的にも子どもの注意を引きつけたと思われる。また、ミュージシャンが奏でる音色はストーリーを言葉で理解しきれない観客に、聴覚から情動に訴えることができ、その場を楽しむことに大きく影響を与えた。ミュージシャンが創造する公演のリチュアルが、通常の公演と同様もしくはそれ以上に効果を果たしたことが考えられ、その重要さが示唆された。プレイバックシアターはインタビューと上演部分で成り立つが、言葉の理解が難しい観客にとって、インタビューで理解できなかったストーリーを上演部分で理解することが出来る。そのため、アクターやミュージシャンは公演の場、全体の一体感を維持する為にも不可欠で、理解の難しい観客に言葉で伝えきれない分、その声や音楽の質や抑揚、強弱、アクターの動きなど、多様な表現

方法が使えるよう研鑽が必要と考えられた。

3-5 安心安全な場作りの為の物理的・人的環境

障害児者の活動は「旅行、釣り、キャンプ等」に次いで「コンサートや映画、スポーツ等の鑑賞・見学」が多く、比較的参加しやすい活動である。しかし、外出する肢体不自由児者の半数近くが外出する上で困ることや不満を感じており、建物の設備の不備を訴える人も多い⁷⁾。今回、2公演で延べ80人近い参加者が集まり、ともにプレイバックシアターを行うことが出来た。これだけの人が集まった理由として、会場が施設の一部であったことがあげられる。障害児者の中には、痰の吸引が必要であったり、新しい環境に不慣れであったり、広いトイレでないと対応できない場合があり、初めての場所に足を運びづらいことがある。しかし、福島整肢療護園の会場は障害児者や保護者のほとんどが通い慣れた場所であり出かけてくるのに抵抗がなかったと考えられる。

また、事前に作成したチラシに、楽器を使うこと、発作が起きたり不安に思ったりする子どもがいるかもしれないこと、公演中の出入りが自由であるとの旨を記載しておいた。障害児者の中には聴覚過敏や、てんかんを合併している場合があり、突然始まる楽器の音や、アクターの大きな声で驚き、その場にいることが難しい場合がある。今回の公演では、音のために途中退席する参加者はいなかったが、参加者が自由に出入りしても問題ないと安心感を与えることが、演劇という非日常の空間に足を運びやすくする一つの要因だったと思われる。

会場の環境づくりとしては、多数の職員の参加があったことも大切な条件の一つだったと思われる。障害児者の間に椅子をおき、公演の進行中も声をかけながら参加している職員の姿があった。コンダクターの言葉の理解に差があり、近くで注意喚起されないと集中できない子どもにとっては、自分の近くで自分にあった話し方をされることで、何が起きているかを理解できた。職員の行動が、客席と舞台とを結びつけることとなり、一体感のある環境作りがされていたと思われる。また、AさんBさんCさんは、テラー席に着く時点で既にストーリーが決まっていた。観客席で馴染みの職員とのやり取りがあったことが、安心感を与えストーリーを浮き上がらせやすくしたものと考えられる。

今回の公演を通して、コンダクターやアクター、ミュージシャンだけでなく、会場の環境や人的環境がプレイバックシアターの場を安全に導く為に必要な要素であると考えられた。

3-6 コンダクターに求められる能力

コンダクターは、テラー、ストーリー、アクター、観客の 4 つの領域に対して配慮する必要がある。⁵⁾

テラーへの配慮として、コンダクターとテラーの信頼関係作りはインタビューの上で重要である。今回は、コンダクターが元施設職員であり、療護園で何度も顔を合わせた事があった。コミュニケーションに時間のかかるテラーであったが、知っている人が話を聞いてくれる安心感があり関係作りがスムーズであったと思われる。また、元職員であったコンダクターがテラーの生活の概要を把握していたことで、インタビューでは、より絞り込んだ選択肢の提示を可能にし、円滑なインタビューが出来た。このように、コンダクターとテラーが療護園という同じ環境を共有していたことが、ストーリーのインタビューに大きな影響を与えていたと考えられる。

インタビュー以外でも、これまで述べてきたように、今回の障害児者への公演は通常の公演と異なる点が多い。アクター、ミュージシャンはコンダクターのように観客やテラーに注意を配り、そこに隠れている背景に気を配ることが必要だった。テラーや観客の間に通訳的に介在する職員や保護者は障害児者が自分のストーリーを想起しやすいような言葉がけをし直していた。コンダクターが配慮すべき 4 つの領域の内の、観客に対する配慮の一部を、コンダクター以外の出演者や観客が担うということが起きた。しかし、公演の流れ全てを握り動かしていくのは 1 人のコンダクターであることには変わりはなく、強さを求められる場面もある。A さんのインタビューの途中、付き添いの職員が、A さんが話しやすい雰囲気を作り質問し直していたとき、その後の会話が職員とテラーのみで進みそうになった。そこで、コンダクターはすぐにテラーの言葉を拾って、観客との間をつないだ。その結果、再びコンダクターが質問する流れができた。通訳をしてくれる職員によって、円滑な進行が出来るのは間違いないが、プレイバックシアターの場合が居心地の良い物になるために、客席と舞台との一体感を保持することはコンダクターの大事な役割である。今回のように通訳を介し、観客から見る事の出来ない文字盤をなど使ったインタビューになる場合は特に、一体感を強く意識し進行していく必要があると考えられる。

また、安心な場を提供するためには、コンダクター自身に、障害児者が公演中に示す反応や行動を受け入れる準備が必要である。例えば今回はテラーが不随意運動や過緊張による体の動きが現れたとき、無理に止めようとするのではなく、自分のペースで適応する間

を保証する姿勢を示すことも、テラーだけでなく客席にいる他の障害児者にとっても安心感を与えられたと考える。場合によっては、テラーが落ち着かず、質問の方法の変更した方が良い場合もあるだろう。コンダクターはテラーの様子を観察し、適宜判断することが求められる。そのようなコンダクターの進行が心理的緊張を緩和し、みんなが楽にプレイバックシアターを楽しむことにつながると考えられる。

コンダクターには観客への対応を問われる場面もある。今回、ストーリー上演中に、ミュージシャンの奏でる音楽に反応し、観客席の障害者が歌い出すことがあった。上演を妨げるほどのものではなかったため、コンダクターは様子を見ることにし、ストーリーの上演は続けられた。会場内の誰もが嫌な顔をする事なく、その状況を受け止めていた。観客に障害児者への理解があったことが大きな要因であったと考えられる。これが、テラーや他の観客を脅かすほどの行為であったなら、コンダクターは何らかの対応が必要であり、公演参加者全てにとって安全で居心地の良いものになるよう、気を配らなければならない。今回の公演では「観客が歌い出してしまうという微笑ましい出来事」であったが、障害児者にはてんかんや呼吸障害、消化管障害など様々な合併症を抱えている場合もあり、公演中に発作が起こることも考えられる。コンダクターは予想される事態と、その事態にどのように対処するかを、事前に主催者と考えることも重要である。また、同席した観客が突然の事態で動揺する事も考えられ、その時に観客を安心させ場を落ち着かせる事が出来るようなコンダクターの言葉がけについて考えておくことも、コンダクターの必要な準備と考えられる

4、結論

障害児者がプレイバックシアター公演でテラーになるためにはコンダクターの話していることを理解できること、音声言語以外でも何らかの表出手段を持っていることが必要である。コミュニケーションに困難を抱える障害児者へのインタビューは時間が長くなることが予想され、少なく核心を突いた質問を行えるコンダクターの技量、少ない質問でも演じられるアクター、ミュージシャンの修練と事前準備が欠かせない。また、パフォーマーが観客と一致していることが大きく影響し、観客との一体感を生む。その他、会場の準備や、チラシなどによる事前の予告、参加者の間に入って声をかける身近な人の存在の必要性、それら様々なことを統括できるコンダクターの能力など、通常の公演以上に多くの配慮点があることが示唆された。

5、おわりに

福島整肢療護園では、重度の障害を持っている障害児がプレイバックシアターを通して自分のストーリーを語り多くの観客がそれを共有することが出来た。考察から、たくさんの条件がそろったために公演が成功したことが見えてきたが、世の中にはここでは触れられていない視覚、聴覚の障害や内部疾患、情緒障害などを抱えている人もいる。今後、そのような人たちにもプレイバックシアターを行う上での要素や配慮が検討されていくことが望まれる。

<謝辞>

本稿を書くことが出来たのは、障害を持つ子ども達が自分の表現で私に接してくれたことが始まりでした。多くの子ども達とプレイバックシアター公演開催に協力いただいた福島整肢療護園の吉原康氏と多くの職員の方々に、心よりお礼申し上げます。公演開催にむけ私が入団する以前より支援し協力してくれた劇団プレイバックカーズのメンバーに感謝いたします。本稿を書くにあたってご指導くださったジョナサンフォックス氏、宗像佳代氏、小森亜紀氏に感謝いたします。最後に、私の活動を支えてくれる夫と本稿を書き終えるのを膝の上で待っていてくれた小さな息子に、特別な「ありがとう」を送ります。

注釈

注1 マカトン法で用いられる動作によるサイン。マカトン法とは言語やコミュニケーションに問題のある子どものために開発された言語指導法。

注2 音声言語の理解・表出に困難を抱える人が使う「絵」による代替コミュニケーションの一つ

* 注3 役を振られていないアクターがストーリーを効果的に見せるためにとる役のこと

文献

1) 中邑 賢龍 他：言語的コミュニケーションが困難な重度障害児・者の自己決定・自己管理を支える技法の研究とマニュアルの開発 厚生労働科学研究研究費助成金（障害保健福祉総合研究事業）平成 13 - 14 年度総合研究報告書,2003

- 2) 藤村宣之：いちばんはじめに読む心理学の本③発達心理学一周りの世界とかかわりながら人はいかに育つかー, ミネルヴァ出版, 2009
- 3) 井澤信三、小島道生：障害児心理入門、ミネルヴァ書房、2010
- 4) Salas J: What is “Good” Playback Theatre? Fox J, Dauber H: Gathering voices. Essays on Playback Theatre. Tusitala Publishing, 1999.
- 5) 宗像佳代：プレイバックシアター入門-脚本のない即興劇-, 明石書店、2006
- 6) 中川信子：子どものこころとことばの育ち, 第8刷, 大月出版, 2009
- 7) 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課：平成18年身体障害児・者実態調査結果, 2008

付表

プレイバックシアター公演

私たちの気持ちを見つめる日

私たちは毎日いろいろなことを考え、いろいろなことを感じて過ごしています。
今日も、昨日も、その前も。いつも変わらない。
そう思っているけど、実は自分はいらないものです。

お友達は  今、何を  考えているのだろう。 

お母さんは  その時、どんな気持ちだっただろう。 

そして、自分は  どんな感じ？ 

プレイバックシアターは脚本のない演劇です。
私たちが経験してきたことが、短い劇になって、そこで再現されます。
私たちの気持ち、みんなで見てみましょう。

日 時：2012年10月14日(日)
14時開場 14時半開始 16時終了(予定)

場 所：福島整肢療護園 希望館

出 演：劇団プレイバックーズ、吉原康先生(ミュージシャン)

対 象：りょうご園に入所しているお子さん、通っているお子さんと
そのご家族

申込方法：別紙申込書にて

申込締切：10/5(金)

この公演は、3.11の東日本大震災後に福島の子供達を心配したイギリスの友人達の支援で行なわれ、今回は特別にりょうご園を利用するお子様方をご招待します。
プレイバックシアターは即興で楽器も使用します。
発作や、泣いてしまう不安がある方でも途中入場、退席可能ですので、お気軽にお越し下さい。



<申し込み・お問い合わせ先>
事務または相談室

図1. 作成されたチラシ